

マレーシアの若者のライフスタイル チョウ・プエイ・クエン (マレーシア)

マレーシア青年社会および青年育成法では、15歳から40歳までが若者と定義されています。この定義は他の国々と大きく異なるのではないのでしょうか。ほとんどの国の「若者」のイメージは、いまだ成長の段階にあり、さまざまな影響を受けやすく、変化に対する理解力が高い人びと、というものでしょう。ですから、この定義については、マレーシア人の間でもあまり説得力を持たず、一般の人びとからの批判を浴びています。

■政府の取り組み

マレーシアの青年スポーツ省は、かつて、マレーシア若者インデックスと呼ばれる指標を作りました。これはマレーシアの若者のライフスタイルの質を測ることを目的としたものでした。しかしながら、2006年を最後に調査グループは研究を中断しています。収集されたデータの信頼性に非難や不信が寄せられたこと、さらには、調査におけるいくつかの重要なキーワードの定義に混乱があったことが主な原因だと思われます。また、研究開発の取り組みをよそに、若者のライフスタイルの質の向上を目的として、マレーシア政府がスポーツに関するセンター、施設、プログラムを提供しようとしたこともありました。残念ながら、こうしたプログラムに対する反応は、予想したほど良いものではありませんでした。

■NGOの取り組み

政府のみならず、非政府組織もマレーシアの若者のライフスタイルの向上のために、積極的な取り組みを実施しています。その一例が、2008年に開始された「マレーシア若者ライフスタイル・ショーケース」です。2008年以降、このイベントに注目し始める人が増え、好意的な反応が広がっています。このイベントは、今やマレーシアでも指折りの若者のフェスティバルとなっています。また、若者のライフスタイルや福祉に関する会議、コンクール、アートデザイン・フェスティバル、ゲーム大会などもあります。

今日のマレーシアの若者のライフスタイルについては、大きなポイントがいくつか挙げられ、これらは、教育、仕事、余暇の活動に分類することができます。

■教育

まず教育に関しては、さらに放課後の個人授業、課外活動、能力構築レッスンの3つに分けることができます。中等学校の学生がプライベートで個人授業を受けることは、マレーシアではごく一般的です。長時間にわたって大変な労力を要する科目がおおよそ10科目もある中等学校の学生のことを考えてみてください。学校での時間や宿題にかかる時間を差し引くと、娯楽や余暇を楽しむ時間など、マレーシアの中等学校の学生にはほとんど残されていません。その他にも、ほとんどの中等学校の学生は、課外活動に参加するように求められ

ます。そしてほとんどの場合、制服を着て活動する組織(ボーイスカウトやガールスカウト、学生教練隊、聖ジョン救急機構など)に少なくとも1つ、さらにクラブやスポーツ活動(チェスクラブやバドミントンクラブなど)に少なくとも1つ、参加するように求められます。土曜日の朝のミーティングの時だけ学校に行けば良い、といったクラブも中にはありますが、制服を着て活動する組織の場合、トレーニング、マーチング、キャンプ、イベントや行事の準備のためなどに、別途時間を割かなければなりません。確かに時間はとられますが、正課と平行して実施される活動に参加することは、学生が互いをより深く知り、友情を育み、スキルやリーダーシップを磨くための手段にもなります。若者のライフスタイルに見られるもう1つの傾向として、自らの興味や才能を伸ばすためにレッスンを受けるということが挙げられます。これは親に強制されている場合もあれば、自らの意思で受けている場合もあります。こうしたレッスンは、ピアノ、絵画、書道、歌などのスキル構築のコースから、テコンドー、水泳、バドミントンのレッスンといった身体のトレーニングまで、さまざまなものがあります。このように、中等学校に通う若者の時間とエネルギーのほとんどが、今日、どこに費やされているのか、簡単に想像できるというものでしょう。大学生の場合は時間割がフレキシブルなこともあり、中等学校の学生に比べると自由時間は多くなります。但し、プライベートでの個人授業はないものの、グループでのプロジェクトや課題のためにコースの仲間との間で多数のミーティングが開かれます。

■働き方

仕事に関していうと、大学を卒業した若者だけが働くのではなく、大学に入学する前の学生や大学に在学中の学生も働きます。中には、学校が休みの時にセールスプロモーター、事務員、レストランのウェ이터やウェイトレスなどのアルバイトをして、臨時のお小遣いを稼ぐ学生もいます。こうした学生の場合、すべきことが多いため学校がある時に働くことはまず無理なのです。中等学校の学生と違い大学生は自分の時間を調節できます。また、大学生の中には、これ以上は親の負担になりたくないとの思いから、生活費や学費を自分で出すために働き始める人もいます。大学生の間で最も一般的な仕事の1つが直販ビジネスです。勉強が忙しい学生の場合、短期の販売会の仕事だけする人もいます。卒業して働く場合、故郷を出て働く人が多く、つまりこれは、親と離れて暮らすということです。こうした場合、残業がなければ、仕事帰りに同僚や友人と食事を食べたり映画を見たりして、外で遊ぶことを楽しむ人が多いようです。中には、語学やスキルを身につけるために、特別に授業を受ける人もいます。また、ほとんどの場合、以前ほど(学生時代ほど)体を動かしたりスポーツをする機会がないので、ジムのコースに通ったりヨガのレッスンを受ける人もよく見受けられます。

■余暇の使い方

最後に大切なのが余暇の活動です。若者のライフスタイルにとって、余暇の活動も重要な

役割を果たしています。他の国の若者と同様に、コンピューターやインターネットはマレーシアの若者のライフスタイルには欠かせないものです。マレーシア若者インデックス調査 2006 のデータによると、メディアの浸透を示す指標は、全体で 84.8 ポイントでした。家でテレビを見たり、インターネットを楽しんだり、「フェイスブック」のようなオンラインのソーシャルネットワークを使ったりすることに加え、若者は放課後や仕事帰り、もしくは週末に映画館に足を運ぶことにも好んで時間を費やしています。さらに、ショッピングも若者の間では人気です。メディアが広く浸透した結果、西洋の文化のみならず、日本、韓国、台湾などの国々のファッションや娯楽のニュースや最新情報にも、マレーシアの若者は強い影響を受けています。その他の年齢層と比較すると、若者は、特にファッション関連のショッピングに多くの時間を費やしています。また、ここで注目すべきもう 1 つの若者の余暇の活動として、**Mamak** (ママッ) (タミル・ムスリム) のレストランで、大学生が夜食を取りながらとりとめもなく時間を過ごしたり、おしゃべりしたりする習慣も挙げられるでしょう。

■男女ともに徴兵されるトレーニングプログラム

もう一つのポイントは、2003 年に開始されたマレーシア・ナショナル・サービス・トレーニングプログラムです。このプログラムは 3 カ月にわたって実施されます。他の多くの国々とは異なり、軍の兵力としてのトレーニングを実施するのではなく、このプログラムの主要な目的は、民族が異なる若者同士の友情を育み、マレーシアの教育機関における人種的分極化という問題に対応する、というものです。男性も女性も徴集兵として選ばれることがあります。というのも、マレーシア国民として登録されている 18 歳の若者の全員から、コンピューター処理によってランダムに選ばれるからです。当初は、トレーニングプログラムが自分の娘にとって厳しすぎる内容になるのではないかと心配する保護者がたくさんいました。しかしながら、プログラムのスケジュールは、学校のガールガイド団やボーイスカウトのキャンプと、期間が長いことを除けば似たようなものです。結局、ほとんどの人がこのプログラムを受け入れるようになりました。そして一部の若者は、さらには若い女性までもが、こうした機会を恐れるどころか、むしろトレーニングプログラムに選ばれて参加することを希望するようになっていきます。プログラムは恐れの対象というよりは、貴重な経験の機会と捉えられているようです。

■マレーシアの若者のジェンダー平等

一般的に、マレーシアの若者は、男性も女性も、学校、仕事、毎日の生活において平等の権利と機会を享受しています。学校では、代表、委員会メンバーなどに選ばれる際にも、平等に扱われます。仕事についても、男女のどちらにも差別なく同様の昇進の可能性があります。また、余暇の過ごし方についても、男性と女性のどちらにも、自分のやりたいことを選んで楽しむ自由があります。学校のクラス代表やクラブ部長、もしくはオフィスのリーダーやマネージャーが女性であることも普通です。つまり、個人のライフスタイルを決めるのは、

性別に関係なくその個人の選択であり好みの問題なのです。

最後にまとめますと、若者の時間のほとんどを占めるのは勉強と仕事です。中等学校の学生はキャンプなどの活動にまだ参加しますが、仕事を持つ若者のライフスタイルについては、ほとんどの時間がメディアとショッピングで占められています。自分磨きや運動に時間を費やす人と比べると、こうした種類のライフスタイルは健康的とは言えないかもしれませんが、少なくとも有害とは言えないでしょう。マレーシア若者インデックス調査 2006 のデータによると、逸脱行動に関与しないとの回答は 87.4 ポイントであり、これは、違法レース、公共物の破損、ドラッグなどの不法行為に関与するマレーシアの若者がほとんどいない、ということです。困っている人を助けるボランティアの仕事など、より建設的な活動にマレーシアの若者が費やす時間が将来増えることが望まれます。